
ナミダカフェ-上

沙夜菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナミダカフエ・上

【NNマーク】

NN8884V

【作者名】

沙夜菜

【あらすじ】

他サイト掲載中。

これまた背伸びした恋愛ものです。

(前書き)

お久しぶりの投稿です。ノートが中途半端に余ったので、行くがまま書いちやつた代物。連載にするほど長くはありませんが、一つにまとめるには長すぎる、これまた中途半端な長さなので、いくつかに分けます。

「今日もいいの？」

俺が驚いて顔を見返すと、はい、と店主である彼女はうなずいた。ただ、その顔はどこか浮かない表情で、だから余計に悪い気がした。一人、東京にやってきてから間もないころ、突然この喫茶店を見つけ、ふらりと入りこんだのが最初だったと思う。出されたコーヒーは生まれてから飲んだコーヒーの中で一番美味しい、それ以降は他のなんか飲めないなと思うほどだった。そして会計の時になつて財布がポケットにないことに気付き、焦つて何も考えられなくなつた俺に彼女は言つたのだ。

「大丈夫です、今回は」

上京して早々食い逃げ犯になりかけた俺は、有難くこの言葉にすがりつくことにした。

家に帰つて財布の中を覗いてみると、とても喫茶店に行くという楽しみを作れるような余裕なんてなく、もう行くのはやめておこうと思つたのだが。

「……返さなきやいけないし」

あまりにもあのコーヒーが美味しかつたといつことで、重くのしかかつっていた罪悪感を言いわけのようにつぶやいて、俺は再び、その喫茶店へ出向いたのだった。

それ以来、2杯飲んだら1杯分、3杯飲んでも2杯分と、俺にだけ1杯分まけてくれるようになつた。

その状態が2年ほど続いて、彼女の表情も2年前から沈んだままだ。……いや、はじめて行つた時はまだ明るかつたような、気もする。

今なら喫茶店が負担になるほど切り詰めた生活はしてないし、コーヒーだっておまけしてもらわなくとも大丈夫なのだが、強引にでも払おうとすると「いいですから、本当に大丈夫ですから」と泣き

そうな顔で言うものだから、今は素直に受け取ることにしてこう。
彼女の顔を見ると、やはり悪い気はついてきてしまつただけ
ど。

その日は頼んだ覚えのないパイがそつと机に置かれた。
驚いて彼女を見上げると、「新作の試作品です」と言ひ。周りを見てもこれをもらつているのは俺だけで、ありがとうと小さく言うと、どこか嬉しそうに彼女は微笑んだ。

カウンターの方へ戻つて行く彼女の後ろ姿を見ると、キュッと耳たぶを引っ張つて、その拍子につけていた小さなイヤリングが落ちたようだ。あわてて拾い上げている姿が面白くて可愛くて、笑いを堪えながらパイを齧つてみる。何層にも積み重なつたパイ皮の間から出てきたソースが美味しい。コーヒーが美味しいなら、パイも美味しいわけだ。今までにはコーヒー以外に何も頼んでいなかつたが、今度から何かもう一つ食べてみようと思つた。

ただ、さつきの耳たぶを引っ張る癖はどこかで見たことがある気がした。いつか、どこかで、誰かが

「朝香」

そうだ、朝香ヒナキ。苗字も下の名前みたいな人、と俺の中で認識されていた、中3の時のクラスメイト。「ヒナキ」の字面は忘れてしまつたが、いや、片仮名だったよつた氣もする 確かそんな名前だつたはず。

「あの、いきなりなんですけど……伏原中学出身だつたりします?」レジでどきまぎしながらそう聞いてみると、彼女の目が少し変わつたよつた、気がした。

「はい、あなたもですよね……光野君」

突然名前を言われても、驚きはしたが怖いとは思わなかつた。

「朝香さん、朝香ヒナキさんですよね」

俺が言ひと、はい、と嬉しそうに彼女はうなずき、やつと氣付いてくれましたか、と小さくつぶやく。

どうせこのあと用事もないし、他のお客様が帰るまで俺は待つてお

くことにした。

彼女が朝香と気付くと、さつきまで何とも思わなかつた目鼻立ちが中学時代の朝香の姿と重なつていいくのが不思議だ。

「さつき“やつと”って言いましたよね。朝香さん、前から知つてたんですか？」

俺の問いに、彼女は気恥ずかしそうにうなづく。

「言つてくれればいいのに」

少し口を尖らせると、朝香は何も言わずに微笑んだだけだった。

次の日、格段に「コーヒーの味が落ちた気がした。

美味しいか不味いかに分けたら断然「美味しい」に入るが、前と比べると、俺でも分かるくらいに落ちている。

何でだらうと、カウンターの方にいる朝香をチラリと見ると、その表情は喫茶店に通い始めて初めてみるほど、明るかつた。

元気になつたのなら味もよくなりそうなものだが、なんせ彼女は中学の頃から風変りなところがあるし、普通に考えるものとは少し離れた結果になるのかもしれない。

次の日も、味は昨日と変わらないままだつた。2年間あの味で舌が肥えてしまつたらしい俺は、我慢できずにカウンター席へ移動した。

「どうかされましたか」

彼女が不安げな顔で聞いてくる。俺が首を振つてなんとなく、と答えると、そうですかと彼女は笑つた。

相変わらず動作はそつとしたものだつたが、表情は――昨日までを雨とすれば、昨日、今日は雲ひとつない快晴。

「なんかあつたんですか」

今度は俺が尋ねると、朝香は首を傾げた。

「……最近、表情が明るいから

朝香は顔を赤らめて、

「光野君が気付いてくれたからです」

と言つ。味が落ちたの、もしかして俺に原因があつたりするの

か。朝香に暗い表情でいろとは言わないが、やつぱりあの「コーヒーの味が恋しい。

「コーヒーはや、今まで沈んだ顔してたのも、俺が気付けなかつたら?

「はい?」

「……なんか、ごめん」

思わず謝つた俺に、朝香ははじめて可笑しそうに笑つた。今までそつと微笑む笑顔しか見たことがなかつたから、この笑い方は新鮮に見える。つられて俺も笑うと、奥から従業員らしき人が顔を覗かせた。この人にとっても、朝香のこの笑い方は珍しく映るのだろうか。

壁にかかっている時計を見上げると、もう夕方の4時だ。周りの客も徐々に減つていて。

「中3の時　いや、もう1年の時からずっと光野君を田で追うようになつてました」

朝香も客の人数を察したのか、話し始めた。

「何でだつたかな、ちゃんとした理由は覚えてないけど、廊下で教科書落としたときに拾つてくれたりとか、落ちたペンが手の届かない奥まで転がつちゃつたときに、わざわざ床に這いつくばつて取つてくれたこととか、とにかくそんなところに惹かれたんだと思います」

惹かれた。　「これは、現在進行形なのだろうか。

「だから、三年のクラス替えの時、思わず一覧表二度見しました。すつごく嬉しかつたんです。本当に。一番心に残りそうな年に同じクラスになれて、卒業アルバム同じページに写れて」

「こっちの顔が熱くなつてきて、思わず俺がうつむいた。『ごまかす』ように「コーヒーを飲んでみるが、喉を伝つて落ちていくのが異様に遅い。

「卒業式の日に告白したいとは思つてたんですけど

自らのカップを手で包みながら朝香は苦笑いして、勇気が足りま

せんでした、と言つた。

「でも何で気付いたんですか？」

やつとそつちの話題回避、と若干ホツとして、俺は答える。

「パイくれた時に、耳引っ張つてたじやん。なんか同じような癖の奴いたよなあと思つて、朝香じやん、みたいな」

朝香は頬に手を添えて、見られてたんですか、と恥ずかしげに笑つた。

そのまま、朝香が言つた「惹かれる」だの「田で追う」という言葉は紛れてしまつて、心のどこかでホツとしている自分に苛立つ、罪悪感と共に店を出る。

結局、「コーヒーの味の秘密もよく分かつてない。

家に帰つて、時間が経つにつれ罪悪感が膨らんできた。やがて頭の中が自分への嫌悪と朝香への罪悪感という最悪な一色に染まつた時、朝香の言葉を思い出し卒業アルバムを引っ張り出す。

「うわ、全然変わってないな」

アルバムの中で笑つてゐる朝香を見て思つた。　変わつてないのに、俺は気付けなかつたのか。

対する俺は、自分でも変わつたのかどうか分からない。でも、朝香が俺だと分かつたということは、そこまで変わつてもいいのか。そして、名簿的に朝香の写真と俺の写真は離れている。

「こんなんでも、嬉しかつたんだとさ」

中学でも高校でも、告白されたのなんて数えるほどしかないし、付き合つたのも一人か二人くらいだ。そのうち一人は、俺の方からは好きという感情は欠片もなかつたが、「付き合つてゐるうちに好きになるかも」と思つていたらいつしか泣かれて、離れて行つた。他の一人は、「思つていた人と違つ」と言つられて、これも離れて行つた。

そんな嫌いというかなんというか、ちょっと悲しいような恋愛したことがない俺だが、こんな風に思つてくれていた人はいたのだ。

「付き合つてゐるうちに」なんてことはもう考えないと決めた。

朝香はきっとその女子みたいに目の前で泣いたりはしない。誰もない暗闇で、一人、静かに深く傷つきながら泣くのかもしれない。彼女の気持ちを、踏みにじるわけにはいかなかつた。

(後書き)

「朝香はペン落とし過ぎだ」という突つ込みは心の中に隠しておいてくださいね。

書こうとも思ったのですが、というか試したのですが、いつきに雰囲気が崩れたのでやめました^ ^ ;
では、「下」に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8884v/>

ナミダカフェ-上

2011年8月18日03時28分発行